

金水 敏の主要な著書及び論文の目録

2020年2月現在

金水敏の研究成果を、その研究対象から、「存在表現」「テンス・アスペクト」「受動文」「指示詞」「終助詞・感動詞」「敬語・授受表現・受益表現」「格助詞・係助詞・情報構造」「古典籍の翻刻・注釈・解題」「役割語・翻訳」「文章・文体・語彙・文献史」という10の観点に分類し、解説する（ゴチック体は編著書を著す）。末尾に、金水が編著者として加わった著書の目録を付する。

1. 存在表現関連

1. 金水 敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房（総ページ数：327頁）。

日本語（和語）の存在動詞「ある（あり）」「いる（ゐる）」「おる（をり）」を中心に、その意味の違い、使い分け、文献における歴史的变化、方言における地理的分布について、記述的、理論的の両面から詳述している。本書は金水の学位論文（博士（文学）、2006年）であり、また2006年度の「新村出賞」を受賞している。

存在表現を、主語の有生性（人間を中心とする有生物か、それ以外か）の面と、「限量的」か「空間的」か（抽象的な有無多少を表すか、空間の特定の位置を占めるか）という面に分けて、「ある」「いる」「おる」の意味的あるいは地理的分布がどのように推移してきたかという問題を中心に論じている。歴史的には、万葉集、源氏物語、平家物語、近世洒落本・滑稽本、SP落語、近代小説等多彩な資料を取り扱っている。また地理的分布については、国立国語研究所（1967）『日本語地図 第2集』の第53図に対する解釈を示している。理論面では、生成文法理論や形式意味論を援用している。

本書の内容をフォロー・アップする論文として、以下の論文がある。

2. 金水 敏 (2018) 「リスト存在文について」岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）『ヴァリエーションの中の日本語史』, pp. 89-100, くろしお出版。

3. 金水 敏 (2019) 「SP レコード資料における人の存在文」金澤裕之・矢島正浩（編）『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』, pp. 190-199, 笠間書院。

また次の論文は、本書の近代小説における「いる」「ある」の推移のデータを用いて、より高度な統計処理により再評価するという内容になっている。

石井正彦 (2019) 『探索的コーパス言語学—データ手動の日本語研究・試論—』第12章「蛇

行箱形 S 字カーブの発見」 pp. 309-331, 大阪大学出版会.

2. テンス・アスペクト関連

4. 金水 敏 (1983) 「上代・中古のキルとヲリ—状態化形式の推移—」『国語学』134: 1-16, 国語学会
5. 金水 敏 (1993) 「状態化形式の推移補記」松村明先生喜寿記念会(編)『国語研究』 pp. 262-277, 明治書院.
6. 金水 敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」田窪行則(編)『日本語の名詞修飾表現』 pp. 29-65, くろしお出版.
7. 金水 敏 (1994) 「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』178: 18-24, 国語学会.
8. 金水 敏 (1995) 「「進行態」とはなにか」『国文学 解釈と鑑賞』60-7: 14-20, 至文堂.
9. 金水 敏 (1995) 「いわゆる「進行態」について」築島裕博士古稀記念会(編)『築島裕博士古稀記念 国語学論集』 pp. 169-197, 汲古書院.
10. 金水 敏 (1997) 「現在の存在を表す「いた」について—国語史資料と方言から—」川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』 pp. 245-262, ひつじ書房.
11. 金水 敏 (1998) 「いわゆる`ムードの「タ」'について—状態性との関連から—」東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集編集委員会(編)『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』 pp. 170-185, 汲古書院.
12. 金水 敏 (1999) 「近代語の状態化形式の構造」近代語学会(編)『近代語研究』第 10 集, pp. 391-418, 武蔵野書院.
13. 金水 敏 (2000) 「第 1 章「時の表現」」金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』日本語の文法, 2, pp. 3-92, 岩波書店.
14. 金水 敏 (2001) 「テンスと情報」音声文法研究会(編)『文法と音声 III』 pp. 55-79, くろしお出版.
15. 金水 敏 (2004) 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦記念論文集, pp. 47-56, くろしお出版.
16. 金水 敏 (2006) 「日本語アスペクトの歴史的研究」日本語文法学会(編)『日本語文法』6-2: 33-44, くろしお出版.
17. 金水 敏 (2006) 「「～でいる」について」益岡隆史・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新天地 1 形態・叙述内容編』 pp. 143-156, くろしお出版.

テンスとはいわゆる「時制」のことであり、アスペクトとは、「進行」「結果」等、動詞になんらかの形式を付加して、出来事の「見え方」を操作する文法現象のことである。論文 4,

5, 6, 7, 12 は著書 1 に最終的には内容が取り込まれたものであるので、説明は省略する。論文 8, 9 は、これまで例えば「走っている」と「(晩ご飯を) 作っている」はともに「進行態」として捉えられてきたが、前者は同じ動作の持続であるのに対し、後者は、目的語である「晩ご飯」が出来るまでの過程を指し示すという点で違いがある。論文では後者を「強進行態」と呼んで、このような意味を表す進行態の表現が近世以前には存在しなかったことを述べている。論文 11 は、「(クイズ番組の司会者が) 正解は 3 番でした」などと言うときの「た」の意味を、クイズが出された時点に遡って状態を述べるということを表すものであると主張しており、日本語の「た」が単なる出来事の時制を述べるにはとどまらない機能があることを示している。論文 14 は、このようなテンスの新しい見方をさらにさまざまな文法現象に広げて論じている。著書 13 は、広く時間に関わる文法現象を整理して概説している。論文 16 は、日本語のアスペクト表現が歴史的文献でどのように推移してきたかを体系化して示している。論文 17 は、これまであまり採り上げられてこなかった「いい子でいる」「元気である」等の「～でいる」という形式の意味と用法について整理している。

論文 15 は、アスペクトでいう「結果状態」とは異なり、文脈が推移していくなかでたまたま含意される動作や運動の結果が文意に及ぼす影響について述べている。

3. 受動文関連

18. 金水 敏 (1991) 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164: 1-14, 国語学会.
19. 金水 敏 (1992) 「欧文翻訳と受動文—江戸時代を中心に—」文化言語学編集委員会 (編)『文化言語学—その提言と建設』pp. 547-562, 三省堂.
20. 金水 敏 (1993) 「受動文の固有・非固有性について」近代語学会(編)『近代語研究』第 9 集, pp. 474-508, 武蔵野書院.
21. Kinsui, Satoshi (1997) “The influence of translation on the historical development of the Japanese passive construction,” *Journal of pragmatics* 28: 759-779, Amsterdam, Elsevier Science.

日本語の受身文は有情物を主語とし、主語の指示対象が他者から影響を受ける意味の受身が固有のものであり、非情物を主語とする受身は欧文翻訳の影響によって日本語にもたらされたものであるとの通説があったが、論文 18 では古代語に多く非情物主語の受身が多く存在するという先行研究の指摘を受け入れつつ、古代語にあった非情物主語の受身と近代日本語に特徴的な受身文とは意味の違いがあるという指摘を行っている。すなわち、近代においては無生物の指示対象の履歴を語る受身文が存在するのに対し、古代語ではその種の受身文は存在せず、主に眼前の状態を語るものに偏ると述べた。論文 19 では、近代に発生した特徴的な受身文は「○○によって○○れる」という「ニヨッテ受身文」であり、これは幕末のオランダ語文献の逐語訳から発生し、近代の欧文翻訳調の文体に受けつがれたものであるということを実証的に示している。20 は、主として生成文法の文脈における日

本語受動文の研究史を整理し、ニヨッテ受身文をその中に位置付けている。21 は、それまでの論を統合して英語論文として発表したものである。

4. 指示詞関連

22. 金水 敏・田窪行則・木村英樹 (1989) 『指示詞』日本語文法セルフ・マスター・シリーズ, 4, くろしお出版.
23. 金水 敏 (1990) 「方向と選択—コチラ類の指示詞—」『日本語学』9-3: 22-30, 明治書院.
24. 金水 敏・田窪行則 (1992) 『指示詞』日本語研究資料集, ひつじ書房.
25. 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」日本認知科学会 (編) 『認知科学の発展』第3巻, pp. 85-115, 講談社.
26. 金水 敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4: 67-91, 言語処理学会.
27. 金水 敏 (2000) 「指示詞—直示再考—」中村明(編) 『現代日本語必携』別冊國文學, No.53, pp. 160-163, 學燈社.
28. 金水 敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」生越直樹 (編) 『対照言語学』シリーズ言語科学, 4, pp. 217-247, 東京大学出版会.
29. Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi Ueyama (2003) "The Demonstratives in Modern Japanese," *Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) Functional Structure(s), Form and interpretation: Perspectives from East Language*, pp. 97-128, Routledge Curzon, New York.

著書 22 は、日本語学習者向けの自習書で、豊富なイラストを用いて日本語の指示詞の各種用法を分かりやすく示している。論文 23 は、「こちら (こっち)」「そちら (そっち)」「あちら (あっち)」という系列の指示詞が、方向を示す一方で、選択の意味も持つことを整理して示している。著書 24 は、指示詞に関する主要な研究文献のアンソロジーであるが、編者の立場を示す詳しい解説と、網羅的な文献目録を付している。

論文 25 は、共著者の田窪行則氏が提唱した談話管理理論に基づいて日本語指示詞の機能について論じたもので、特にア系列とソ系列の違いについて画期的な提案をしている。この論文は 1991 年に日本認知科学会の論文賞を受賞した。

論文 26, 27 は 25 の立場をさらに発展させ、「直示」という概念の定義を改め、日本語指示詞のコ系列、ア系列は基本的に直示を本務とし、ソ系列は言語的文脈に現れる先行詞との間で概念を介した照応関係を取り結ぶことが本務であり、一見直示的な現場指示のソ系列の用法も、この性質の延長上に捉えられることを示している。

論文 28 は日本語指示詞の歴史的な変化にも言及しつつ、韓国語、トルコ語の指示詞の体

系と対比してその共通点や相違点を整理して示している。

論文 29 は、田窪・金水による談話管理理論から見た日本語指示詞の記述と、傍士元氏、上山あゆみ氏らの統語論における束縛変項の理論をすりあわせることで、ソ系列の持つ特徴を一層鮮明に示している。

5. 終助詞・感動詞関連

30. 金水 敏 (1992) 「談話管理理論からみた「だろう」」『紀要』19: 41-59, 神戸大学文学部.
31. 金水 敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネの意味論的分析」『学習と対話』93-1:13-19, 日本認知科学会 学習と対話研究分科会資料.
32. 金水 敏 (1993) 「〈言語学の最新情報〉—日本語学 終助詞ヨ・ネ—」『言語』22-4:118-121, 大修館書店.
33. 金水 敏 (1995) 「談話標識の諸レベル—談話管理理論の視点から—」『情報処理学会研究報告』95-51: 59-60, 情報処理学会.
34. 田窪行則・金水敏 (1996) 「対話と共有知識—談話管理理論の立場から—」『言語』25-1:30-39, 大修館書店.
35. 田窪行則・金水 敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3: 59-74, 日本認知科学会.
36. 田窪行則・金水 敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』pp. 275-279, くろしお出版.
37. 金水 敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎(編)『音声による人間と機械の対話』pp. 257-271, オーム社.
38. 金水 敏 (2011) 「第5章 直示と人称 5.1 人称に関わる現象の歴史的变化」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子(著)『文法史』シリーズ日本語史, 3, pp. 191-202, 岩波書店.

ここに集めた論文の多くは田窪行則氏との共同研究によるものであり、さらには認知科学、情報処理、音声対話の機械処理などの研究者との研究プロジェクトの一環として取り組まれている。「今日はいいい天気ですね」「今日はいいい天気ですよ」のような終助詞「よ」「ね」や、「あー」「えーと」等のフィラー、「あっ」「うーん」等の感動詞など、音声対話に特有で、書き言葉中心の従来の文法論では周辺的な要素として研究のメインストリームには登ってこなかった要素が、実は話し手と聞き手の情報共有の調整に関わる成分として重要であるとの見方を打ち出した点で研究史的に重要な論文である。

6. 敬語・授受表現・受益表現関連

39. 金水 敏 (1989) 「敬語優位から人称性優位へ—国語史の一潮流—」『女子大文学 (国文篇)』40: 1-17, 大阪女子大学.
40. 金水 敏 (2001) 「文法化と意味—「～おる (よる)」論のために—」『国文学 解釈と教材の研究』46-2: 15-19, 學燈社.
41. 金水 敏 (2004) 「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4: 34-41, 大修館書店.
42. 金水 敏 (2004) 「敬語動詞における視点中和の原理について」音声文法研究会(編)『文法と音声 IV』pp. 181-192, くろしお出版.
43. 金水 敏 (2005) 「日本語敬語の文法化と意味変化」『日本語の研究』1-3: 18-31, 日本語学会
44. 金水 敏 (2010) 「「敬語優位から人称性優位へ」再考」『語文』第92・93輯, pp. 74-80, 大阪大学国語国文学会
45. 金水 敏 (2011) 「第9章：丁寧語の語源と発達」高田博行・椎名美智・小野寺典子(編著)『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する—』シリーズ・言語学フロンティア, 3, pp. 163-173大修館書店

これらの論文は、一つには「視点」「人称」の問題、さらには「文法化」の問題を取り扱っている。論文39、44では、例えば次のような問題を取り扱っている。現代語の授与動詞は「あげる」「くれる」「もらう」など、話し手を中心としてそこに近づいてくるか、離れていくかという“境遇性”を必ず表現し、敬語的な序列は話し手中心の視点に従属する形で運用されるが、古代語では「給ふ」「奉る」のように、敬意の方向性によって語彙が分化していて、話し手中心の視点には直接は依拠しない。このように、敬語と視点は、相互に依存しつつ、古代日本語では前者が優位で、近代日本語では後者が優位になるという傾向がさまざまな現象で見られることを述べている。論文39、44も同様の問題を取り扱っているが、ここでは例えば古代語「おはす」、現代語「いらっしゃる」という敬語動詞が存在と移動の両方を表すことができるという現象が、移動・存在を記述する際に話し手中心の視点に主眼を置くか、敬語的な中心(最上位の人物)に主眼を置くかという複数の中心が存在し、その力関係が歴史的に(あるいは方言によって)変化しているということを述べている。

また文法化とは、授受動詞「あげる」が動詞テ形の後に付加されて「読んであげる」のように受益関係を表す補助動詞となるような現象をさすが、日本語の敬語や視点表現にこの文法化が大きく関与していることを論文40、41、44が述べている。

7. 格助詞・係助詞・情報構造関連

46. 金水 敏 (1993) 「古典語の「ヲ」について」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』pp. 191-224, くろしお出版.
47. 金水 敏 (1995) 「日本語史からみた助詞」『言語』24-11: 78-84, 大修館書店.

48. 金水 敏 (1995) 「「語りのハ」に関する覚書」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取りたて』 pp. 71-80, くろしお出版.
49. 金水 敏 (2002) 「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」日本語文法学会(編)『日本語文法』 2-2: 81-94, くろしお出版.
50. 金水 敏 (2003) 「シンポジウム"係り結び"から見えるもの—古い問題への新しい取り組み— (総括)」 KLS 23: Proceedings of the Twenty-seventh Annual Meeting October 26-27, 2002, pp. 245-250, 関西言語学会
51. Kinsui, Satoshi (2007) "The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese," *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, pp. 253-261, Kurosio Publishers.
52. Kinuhata, Tomohide, Iwata, Miho, Eguchi, Tadashi and Kinsui, Satoshi (2009) "Genesis of 'Exemplification' in Japanese, Takubo, Yukinori, Kinuhata, Tomohide, Grzelak, Szymon and Nagai, Kayo (eds.) *Japanese Korean Linguistics*, Vol. 16, pp. 87-101, CSLI Publications.
53. 金水 敏 (2011) 「第3章 統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子(著)『文法史』 シリーズ日本語史, 3, pp. 77-166, 岩波書店.
54. 金水 敏 (2012) 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会(編)『近代語研究』 第16集, pp. 349-367, 武蔵野書院.
55. 金水 敏 (2012) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』 89-11: 76-89, 東京大学国語国文学会(編) 明治書院(発行).
56. 金水 敏 (2012) 「日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無」『語文』 99: 45-57, 大阪大学国語国文学会.
57. 金水 敏 (2015) 「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』 第5巻第3号, pp. 108-121, 国立国語研究所.
58. 金水 敏 (2015) 「古代日本語の主格・対格の語順について」江頭浩樹・北原久嗣・中沢和夫・野村忠央・大石正幸・西前明・鈴木泉子(編)『より良き代案を絶えず求めて』 pp. 37-45, 開拓社.
59. 金水 敏 (2015) 「「変項名詞句」の意味解釈について」『日中言語研究と日本語教育』 第8号, pp. 1-11, 日中言語研究と日本語教育研究会・好文出版
60. 金水 敏 (2016) 「「ウナギ文」再び—日英語の違いに着目して—」福田嘉一郎・立石始(編)『名詞類の文法』 pp. 203-214, くろしお出版.
61. 金水 敏 (2019) 「「焦点」の外延的意味論による解釈一斑」『語文』 第112輯, pp. 1-6, 大阪大学国語国文学会

格助詞「を」「が」「の」、係助詞「は」、係り結び現象を中心に歴史統語論の論文を書いている。論文 53 はその中間まとめ的位置を占める。論文 54～57 は現代日本語の疑問文と

いわゆる“ノダ文”の関連について論じたものである。論文 59, 60 は名詞述語文の意味と構造について述べたもので、今後は論文 61 と併せて、大きく“焦点”、“主題”という情報構造と統語構造をつなぐ研究へと発展し、係り結びの議論と統合されることが期待される。

8. 古典籍の翻刻・注釈・解題関連

62. 山口明穂・近藤泰弘・金水 敏・古田啓 (1986) 『音訓篇立索引』古辞書音義集成第二十巻, 汲古書院.
63. 金水 敏・古田 啓 (1988) 「祭文・表白・願文」高山寺典籍文書綜合調査団(編)『高山寺古典籍纂集』高山寺資料叢書第十七冊, pp. 411-499, 東京大学出版会.
64. 金水 敏 (1991) 「解題編 第I部 蘭学資料」大阪女子大学附属図書館(編)『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』, pp. 3-34, 大阪女子大学.
65. 築島 裕・金水 敏 (1998) 「唐本一切経目録書名索引」高山寺典籍文書調査団(編)『明恵上人資料第四』高山寺資料叢書第十八冊, pp. 373-386, 東京大学出版会
66. 金水 敏 (1998) 「方便智院聖教目録(翻字・解題)」高山寺典籍文書調査団(編)『明恵上人資料第四』高山寺資料叢書第十八冊, pp. 387-473, 東京大学出版会.
67. 金水 敏 (1998) 「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」『訓点語と訓点資料』記念特輯, pp. 12-27, 訓点語学会.
68. 土井光祐・金水 敏 (2002) 「高山寺「観智記」鎌倉時代中期写本・解題並びに翻刻」『実践国文学』第 61 号, pp. 92-157, 実践女子大学.
69. 金水 敏 (2003) 「恵果和尚之碑文 一帖(第一部二一一号) 凡例、影印、訳文、訓点要語索引、解題」高山寺典籍文書綜合調査団(編)『高山寺古訓点資料 第四』高山寺資料叢書第二十三冊, pp. 1-51, 東京大学出版会.
70. 金水 敏 (2005) 「金剛寺一切経の古訓点本一『維摩経』を中心に一」石塚晴通教授退職記念会(編)『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』, pp. 95-115, 汲古書院.
71. 金水 敏・廣坂直子・岡崎友子 (2008) 「金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』影印・訓読・解題」国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会(編)『金剛寺蔵観無量寿経・無量寿経優婆提舍願生偈註』(非売品), pp.3-104, 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会.
72. 廣坂直子・金水 敏 (2014) 「国際仏教学大学院大学本『摩訶止観』巻第一(翻字)」国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会(編)『国際仏教学大学院大学蔵 金剛寺蔵 摩訶止観 巻第一』日本古写経善本叢刊第七輯, pp. 21-147, 国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会.
73. 廣坂直子・金水 敏 (2014) 「国際仏教学大学院大学本『摩訶止観』巻第一 解題」国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会(編)『国際仏教学大学院大学蔵 金剛寺蔵 摩訶止観 巻第一』日本古写経善本叢刊第七輯, pp.

- 1-94, 国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会.
74. 金水 敏・山田昇平・中野直樹 (2015) 「日本語史資料として見た岩屋寺蔵『高僧伝』について」国際シンポジウム報告書 2014 東アジア仏教写本研究, pp. 143-156, 国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会.

著書 62 は中世漢字字書の『音訓篇立』の索引である。項目の整列のために計算機を用いている点が、当時としては画期的な試みであった。64, 65, 66, 68, 69 は、高山寺典籍文書総合調査団として調査・執筆に加わった成果である。特に 65, 66 は組版のために、LaTeX という組版ソフトを用いている。このソフトは、数式など組版の難しい学術論文のために開発された高性能なアプリケーションであるが、縦組みの、しかも左振り仮名、返り点、送り点、割り注など複雑な版組みが要求される文献の翻刻に利用したことが当時としては新しかった。この組版技術について報告したものが論文 67 である。

論文 70 以降、文献の所蔵者について大阪府の金剛寺、愛知県の岩屋寺に舞台を移し、『摩訶止観』『高僧伝』といった文献の調査・翻刻に関わっている。

64 は、当時の本務校であった大阪女子大学所蔵の蘭学資料の解題集であるが、この研究成果が、ニヨッテ受動文の歴史的研究である論文 69 へと結びついている。また、64 を収めた大阪女子大学附属図書館(編)『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』は、1992 年の「豊田賞」(日本英学史学会)を受賞している。

9. 役割語・翻訳関連

75. 金水 敏 (2000) 「役割語探求の提案」佐藤喜代治(編)『国語史の新視点』国語論究, 第 8 集, pp. 311-351, 明治書院.
76. 金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』もっと知りたい! 日本語, 7, 岩波書店.
77. 金水 敏 (編) (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版.
78. 金水 敏 (2008) 「第 7 章 役割語と日本語史」金水 敏・乾 善彦・渋谷勝己 (共編著)『日本語史のインタフェース』シリーズ日本語史, 4, pp. 205-236, 岩波書店.
79. 金水 敏 (2011) 「翻訳における制約と創造性—役割語の観点から—」杉藤美代子(編)『音声文法』pp. 169-179, くろしお出版.
80. 金水 敏 (編) (2011) 『役割語研究の展開』くろしお出版.
81. Teshigawara, Mihoko & Kinsui, Satoshi (2011) "Modern Japanese 'Role Language' (*Yakuwarigo*): fictionalised orality in Japanese literature and popular culture," *Sociolinguistic Studies* Vol 5-1: 37-58, Sheffield: Equinox Publishing.
82. 金水 敏 (2014) 「フィクションの話し言葉について—役割語を中心に—」石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』pp. 3-11, ひつじ書房.
83. 金水 敏 (編) (2014) 『〈役割語〉小辞典』, 総頁数 270 ページ, 研究社.

84. 金水 敏 (2014) 『コレモ日本語アルカ?—異人のことばが生まれるとき』 総頁数 240 ページ, 岩波書店
85. 金水 敏・田中ゆかり・岡室美奈子 (共編) (2014) 『ドラマと方言の新しい関係: 『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』 総頁数: 103 頁, 笠間書院.
86. 金水 敏 (2015) 「役割語とその翻訳について」定延利之 (編) 『私たちの日本語研究: 問題のありかと研究のあり方』 pp. 128-132, 朝倉書店.
87. Kinsui, Satoshi and Hiroko Yamakido (2015) “Role Language and Character Language,” *Acta Linguistica Asiatica* 5-2: 29-41, Ljubljana: Ljubljana University Press, Faculty of Arts, Online ISSN: 2232-3317
88. 金水 敏 (2017) 「第 11 章 言語—日本語から見たマンガ・アニメ」山田奨治 (編著) 『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法—』 pp. 239-262, ミネルヴァ書房.
89. Kinsui, Satoshi (2017) *Virtual Japanese: Enigmas of Role Language*, 大阪大学出版会.
90. 金水 敏 (2018) 「小説における仮名の一用法と翻訳—村上春樹作品を例に—」『ことばと文字』 10: 83-89, 発行所: 公益財団法人 日本のローマ字社, 発売所: くろしお出版.
91. 金水 敏 (2018) 「キャラクターとフィクション—宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして」定延利之 (編) 『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』 pp. 64-83, 三省堂.
92. 金水 敏 (2018) 「魅惑するナカタさんワールド」沼野充義 (監修)・曾秋桂 (編集) 『村上春樹における魅惑』 pp. 43-60, 淡江大学出版中心.
93. 金水 敏・田中ゆかり・児玉竜一 (共編) (2018) 「時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる! : 世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」」, 総頁数 135 ページ, 笠間書院.
94. 金水 敏 (2019) 「第六章 アニメキャラクターの言葉」田中牧郎 (編) 『現代の語彙—男女平等の時代—』 シリーズ〈日本語の語彙〉 7, pp. 72-83, 朝倉書店.
95. 金水 敏 (2019) 「村上春樹作品と日本語史の共鳴—『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考—」中村三春 (監修)・曾秋桂 (編集) 『村上春樹における共鳴』 pp. 29-40, 淡江大学出版中心.

役割語とは、「わしが知っておる」なら老人、「存じておりますわ」なら貴婦人、といったように、話し方と特定の人物像が結び付けられたステレオタイプのスピーチ・スタイルのことを指し示す。日本語には役割語を表現する手段が豊富にあり、また役割語的な表現は、ポピュラー・カルチャー作品を中心に日本語の文献に頻繁に現れるという点で、日本語に新たに見いだされた研究領域であると言える。論文 75 は「役割語」の概念が学界に初めて紹

介された文献であり、その内容は著書 76 に受けつがれた。76 は一般書であり、大手新聞を中心に書評に多く採り上げられたので、役割語の概念が広く世に知られるきっかけとなった（なお、著書 89 は 76 を英訳したものであり、大阪大学リポジトリにアクセス・フリーで公開されている）。以後の編著書や論文によって、役割語の研究が着実に深化し、また幅を広げていることが学界内外に伝えられた。以後、日本語教育、テレビドラマの実作、翻訳等の現場にも役割語の概念が浸透しつつあることが、ここに集めた論文等によって知られる。特に 84 は、中国人の表象として永らく認識されてきた〈アルヨことば〉の起源を探り、またその合わせ鏡のような関係にある、中国本土で発生した「満洲ピジン」、およびその影響下で生まれたと考えられ、抗日作品で頻繁に現れる〈鬼子ピジン〉について詳述した画期的な著作である。

この役割語研究を基盤として、翻訳の実態についても調査を始め、「村上春樹翻訳調査プロジェクト」を 2017 年に立ち上げ、現在活動中である。その成果は、『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書』として、大阪大学リポジトリに公開中である。

10. 文章・文体・語彙・文献史関連

96. 金水 敏 (2008) 「第 1 章 日本語史のインタフェースとは何か」金水 敏・乾 善彦・渋谷勝己 (共編著) 『日本語史のインタフェース』シリーズ日本語史, 4, pp. 1-25, 岩波書店.
97. 金水 敏 (2011) 「言語の ecology/ecology の言語—国語・方言・グローバリゼーション—」『日語日文学研究』78-1: 3-11, 韓国日語日文学会.
98. 金水 敏 (2011) 「言語資源論から平安時代語を捉える—平安時代「言文一途」論再考—」『訓点語と訓点資料』127: 80-89, 訓点語学会.
99. 金水 敏 (2013) 「第 15 回 BATJ 大会：基調講演 日本語の正しさとは何か」『BATJ Journal』No. 14, ISSN 1477-4704, pp. 11-16, 英国日本語教育学会 (The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language) .
100. 金水 敏 (2013) 「日本語語彙史とは何か—言語を階層的な資源と見る立場から—」『日本語学・日本語教育 3 語彙』(同、韓国語訳) pp. 71-86/pp. 357-369, Seoul: J&C.
101. 金水 敏 (2015) 「文献と言語変種-文献に残されたことばの多様性が意味するところ」高田博行・渋谷勝己・家入葉子 (編著) 『歴史社会言語学入門』pp. 43-52, 大修館書店.

論文 96 で伝えようとしているのは、日本語の歴史的文献がそれぞれに時代に即応した内容や言語で書かれており、それぞれの同時代的な機能を知らなければ、日本語史という抽象的な体系に接続することができないという点である。以後、この論文を契機として、日本語の歴史的文献の文体・文章・語彙、また文献や文体の社会的威信といった観点について述べているのが 97 以降の論文である。

付録：金水敏が編著者として加わった著書の目録

※公刊されたものみのリストである。

1. 金水 敏・田窪行則・木村英樹（1989）『指示詞』日本語文法セルフ・マスター・シリーズ, 4, くろしお出版（総頁数：111 頁）。
2. 山口明穂・近藤泰弘・金水 敏・古田啓（1986）『音訓篇立索引』古辞書音義集成第二十卷, 汲古書院（総頁数：570 頁）
3. 金水 敏・田窪行則（1992）『指示詞』日本語研究資料集, ひつじ書房（総頁数：211 頁）。
4. 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏（1997）『文法』岩波講座 言語の科学, 5, 岩波書店（総頁数：178 頁。金水は「国文法」 pp. 119-157 を執筆）
5. 金水敏・今仁生美（2000）『意味と文脈』現代言語学入門, 4, 岩波書店（総頁数：260 頁）。
6. 金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』日本語の文法, 2, 岩波書店（総頁数：254 頁。金水は第 1 章「時の表現」 pp. 3-92 を執筆）。
7. 金水 敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』もっと知りたい！日本語, 7, 岩波書店（総頁数：225 頁）。
8. 金水 敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房（総頁数：327 頁）。
9. 金水 敏（編）（2007）『役割語研究の地平』くろしお出版（総頁数：227 頁。金水の執筆担当は導入、第 5 章、第 10 章）。
10. 金水 敏・乾 善彦・渋谷勝己（共編著）（2008）『日本語史のインタフェース』シリーズ日本語史, 4, 岩波書店（総頁数：253 頁。金水の執筆担当は第 1 章、第 7 章）
11. 金水 敏（編）（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版（総頁数：319 頁。金水の執筆担当は導入、第 1 章、第 13 章(共著)）
12. 金水 敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子（共著）（2011）『文法史』シリーズ日本語史, 3, 岩波書店（総頁数：239 頁。金水の執筆担当は「第 1 章 文法史とは何か」(1-17)「第 3 章 統語論」(77-166)「第 5 章 直示と人称 5.1 人称に関わる現象の歴史的变化」(191-202)）
13. 金水 敏・高田博行・椎名美智（共編）（2014）『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房（総頁数：320 頁）。
14. 金水 敏・田中ゆかり・岡室美奈子（共編）（2014）『ドラマと方言の新しい関係：『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』笠間書院（総頁数：103 頁）。
15. 金水 敏（2014）『コレモ日本語アルカ?—異人のことばが生まれるとき—』そうだったんだ! 日本語, 岩波書店（総頁数: 240 頁）。
16. 金水 敏（編）（2014）『〈役割語〉小辞典』研究社（総頁数: 270 頁）
17. 金水 敏・田中ゆかり・児玉竜一（共編）（2018）『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！ : 世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」』笠間書院（総頁数: 135 ページ）

18. Kinsui, Satoshi (2017) Virtual Japanese: Role Language, 大阪大学出版会（総頁数：162
頁。大阪大学リポジトリ OUKA で公開。

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/67215/>)

(以上)